

農業土木を 支えてきた人々

大 原 幽 学

— 北 総 の 農 村 改 革 —

吉 方 博*

I. はじめに

房総半島を南北に分け、北の方面を北総、南の方を南総という。北総は下総の大部分がこれに当たるが、ここでいう北総農村というのは銚子犬吠崎を先端とした九十九里海岸と利根川にはさまれた山間地帯の農村である。幕末の優れた農民指導者であった幽学が指導し、理想とする村づくりを実現させた所がこの北総農村でその中心となったのが長部村、現在の香取郡千瀧町長部である。

幕末の頽廃混乱を極めた世にあって、病弊にあえぐ農民に「性学」という人間救済の学を教え、精神更生を図り、それを根拠として具体的な村づくり、経済生活、農事の実際等を懇切に指導したのである。その間に世界でも最初といわれる産業協同組合の設立、土地の交換分合、耕地整理、住居の移転まで伴う農村改革等画期的な事業を次々と遂行したのである。交換分合、耕地整理等の農業土木事業も幽学が行った理想的な村づくりの一環として重要な事業であった。以下生涯を農民のために捧げた幽学の足跡の一端をここに紹介する。

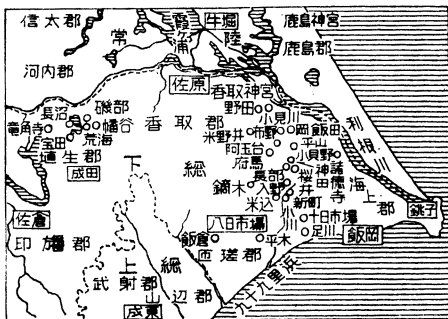


図-1 幽学の関係した下総地域図

* 千葉県成田土地改良事務所 (よしかた ひろし)

II. 幽学の生涯

大原幽学は今から183年前、西暦1797年、現在の愛知県、当時の尾張藩家老大道寺玄蕃の次男として生れたといわれている。恵まれた環境の中で徹底した武士道教育をほどこされ、読書、武芸、茶道、手習いに明け暮れたという。18才の時に、ふとしたことから藩の剣道師範と果し合いを行い、これを斬り殺したことから父の勘当を受け漂泊の身となった。別離に当って父は、「武士たるもの、みだりに身を捨つべからず」「他国の君主に仕うることあるべからず」「民家に子孫を残すべからず」という3ヶ条の訓戒を与え河内守助国の大小二振の刀に3両の金子を添えて授けたという。幽学は終生武士の誇りを捨てず父の教えを守り通したのであった。

流浪の旅に出た幽学は当初武芸で身をたてることを志したが、大和地方遊歴中にある道場で師範を打負かして恨みを買ったことから深く自己を反省し、学問で身をたてる決意をしたのである。以来、近畿、中四国、中部、関東と知人から知人へ、また学者、高僧から地方の有徳の人々を訪ねて教を乞うたのである。中でも近江国坂田郡伊吹山松尾寺の提宗和尚は、幽学に「人々のために道を施すこと」を示唆し、その感化を受けて生涯を世のため人のために捧げる決意をしたのである。時に幽学33才であった。

幽学が初めて房州に足を踏み入れたのは天保2年(1831)35才の時である。最初内房方面を巡遊していたが、次第に北総方面にも知己を広めてゆき、交遊の中心が北総に移っていった。当時の農村社会は幕府諸藩の財政難からくる重税にあえぎ、次第に荒廃していったが長部村においても同じであった。村の名主遠藤伊兵衛は病弊にあえぐ村の建直しを真剣に考えていたが、この時に幽学にめぐり会って、その人柄、村づくりの抱負等に心か

ら傾倒し、この地に留まることを懇願し、幽学も伊兵衛や門人たちの熱意に動かされて、この地に留まることとなったのである。かくして、幽学の理想とする村づくりが始まり、着々と実を結んでいったのである。しかし、当時の幕府政治の貧困は社会秩序の乱れ、役人の腐敗、墮落と、加えて博徒の横行は良民を苦しめ、世間を社会不安に陥れていた。そのころ北総地方には「天保水滸伝」で有名な「飯岡の助五郎」「笹川の繁蔵」などという博徒が権力を振って争いが絶えなかった。中でも飯岡の助五郎は十手をあずかる博徒で出先役人と結託して良民を苦しめていた。

幽学の教化が徹底して風俗が改まることに反感を抱いた博徒等は建設してまもない教導所に乱入し、金銭強請事件をひき起した。この事件の解決が6年という長年月に及び、その間に性学に対する弾圧も加えられ、また門人の中にも不心得のものが続出したため、幽学はその情熱を注いだ結果の空しさに絶望し自決の意を決した。

安政5年(1858)3月7日幽学は門人に長い遺書を残し部落の墓地において割腹自殺をとげたのである。傍らには父から与えられた助国の大小の大刀と金子3両が残されていたという。自刃に用いた短刀には、「難舎者義也」(捨てがたきは義なり)の5字が自刻されていた。時に幽学62才であった。

III. 先祖株組合

幽学の行った農業土木事業の中で最も顕著な業績として先祖株組合の結成を挙げなければならない。先祖株組合は幽学の村づくりの第一歩であった。当時の農村社会は貧困腐敗の政治からくる農民の土地喪失、零細化、小作人化と病弊はつもの一方であった。長部村もその例にもれず以前には40軒あった農家も次々と離農し天保初年(1830)には22軒に減ってしまった。この土地喪失を農民の共同の力で防ぎ、恒久的自作農維持をはかり、安定した農家生活を確立させようとしたのが、先祖株組合である。先祖株組合は、まず組合員が先祖株として5両分(田1反歩)の地株を出し合い、これを共同管理し、これから生ずる利分を積上げ、この利分で他村へ質地に入られて受け戻すことのできない土地を取戻したり、潰れ家を再興したりするのがその大きな目的であった。これは全く幽学の独創により今から142年前(1838)に結成されたもので、世界で最初にできた産業協同組合運動の創始者としても、その業績を高く評価されている。

IV. 土地の交換分合と耕地整理

幽学は先祖株組合によって、強固な団結ができると、

次々と村の大きな改革を進めた。それは天保12年(1841)わが国初めての全村の土地の交換分合と耕地整理事業の実施とそれに引続く住居の分散、移転であった。この長部村の農家は部落北方の小高い丘にある日野神社という鎮守の社を中心に集団的に密集していたため、日当りも悪く、かつ田畑からも遠く、しかもその田畑も広狭様々で各所に散在していたために、耕作、管理、肥料や収穫物の運搬等に不便が多かった。幽学はこの点に着目し各農家の宅地を含めた田、畑、山林等一切の土地の総合集団化を企画し実行したのである。この大改革には多額の資金と労力を要するし、また先祖伝来の土地、家屋を移動すること等は思いもよらないことであったに違いない。しかし現在においては法的な強制力をもってしても実現することが困難なこれらの事業を一介の流浪の民にすぎない幽学が果たしたということはいかに幽学が村人たちに信頼されていたかを物語るものであろう。

事業はまず土地の交換分合から始められ、次いで耕地整理が実施され、その後漸次家屋の移転が行われた。

耕地整理はまず名主遠藤左衛門(伊兵衛の子息)所有の水田1町5反について実施された。現在でいうモデル地区である。この村の田畑は、典型的な谷津田地帯で高低広狭さまざまで、用水は湧出水に頼り、排水は不良で一たん大雨になれば田越しに流出し、ケイハンも水田も押し流されるという状況であった。モデル地区も同様、幅の狭い谷合地で中央に水路があり両側に100坪から3~5坪という大小の田が雑然としていた。幽学は中央の水路を変更して両側にしっかりした用排水路を作り、水源は台地からの湧出水を用いた。区画の規模はほぼ1反歩前後にしたが一様ではなく、地形によっては470坪位のものもあった。水田の均平化、道・水路の改良・ケイハンの築立にはとくに意を用いたといわれる。とくにケイ

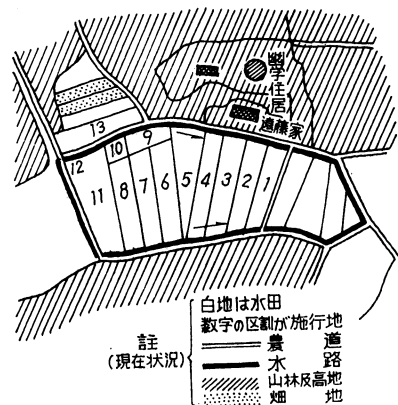


図-2 幽学の実施した「長谷」耕地整理図



写真-1 「長部」耕地整理

ハンの築立に当っては、部落の7才から12、3才位の子供たち36人を集め一列に手をつないで並ばせてケイハンを踏固めさせた。これを「おおなふみ」といったが、この時参加した子供たちで「おおなふみ」の会を作り、年数回集って親睦を続けたといわれる。

幽学はまた地力の維持に強い関心を寄せ「客土」によって土壌の改良を図ると共に、草刈りを奨励して堆肥を増産してこれを施させた。そのため従来は反収4俵位の粗田が耕地整理後は5～6俵も収穫できる美田になったといわれる。また耕地整理された水田には暗キョ排水を実施して二毛作を奨励した。どのような材料工法を用いたかはつまびらかではないが、おそらくは当時としては

ソダあたりを用いたものと推察される。

幽学の耕地整理は長部村ばかりでなく、その後隣村の鍋木宿内（干潟町）、その他の部落に実施されたが、中でも宿内部落の耕地整理は用排水を中央にして、両側に基盤の目のように田地が区画され当時としては相当高度な工事であったと思われる。これらの水田は240年後の現在においてもそのままの形で美田として利用されている。

V. むすび

幽学は以上のほか、住居の分散移転、仕事の割振り等の農業経営の合理化、稲作の厚植えから粗植え、また正条植、自給肥料の製法等農業生産技術、また迷信打破等よくない習慣の改善等々その指導の範囲はきわめて広い。

わが身を顧みず一生を農民のために捧げ、晩年幕府の庄政の前に悲壮な最期を遂げたのであるが、彼が提唱して実践した数々の事業や運動が、今日の農村に着々と実現されていることは幽学の思想がいかに先見的であったかを物語るものであろう。幽学の崇高な精神、広範な知識と卓越した指導力は現代の指導層にとって、最も要求されるであろう。

文 献

- 越川春樹：“大原幽学研究”
- 中井信彦：“人物叢書”「大原幽学」
- 荒川法勝：“歴史と人物「房総人物史話」”

[1980. 6. 13. 受稿]